

熊本の今 続編～発災から1年～遠山香里研究員の現地レポート

平成 29 年 4 月 15 日・16 日、発災から 1 年になるこの日、昨秋に引き続き熊本の益城町・西原村に行ってきた。



前回同様、益城町はテクノ団地に、

西原村は前回と同じ仮設住宅と今回はたこ焼きの炊き出しをした河原小学校を訪れた。生活にも慣れてきたのか被災者の顔からは笑顔がこぼれていた。

テクノ団地でキャンパス熊本の方（被災者の見守り、巡回訪問などを通じた生活支援を各種関係機関と連携して行っている）に、現在の被災者の様子をうかがうと、「支援されることに



慣れてしまい、支援されるのが当たり前になっているようで、生活再建に向け自立する気持ちが見えない」事が課題とのこと。

テクノ団地には「くまもと型復興住宅」なる熊本県内の住宅事業者（大工・工務店）が県産の木材などを使用し建設するモデル住宅が建てられ被災者の生活再建を促していた。

現在、テクノ団地は孤独死者はゼロ。今後、出さないために老人の状態によって、週に 1 回・2 週間に 1 回・1 ヶ月に 1 回・3 ヶ月に 1 回と 4 段階に分けて相談員の巡回を展開している上に、看護師による健康管理の巡回及び健康相談会を実施して、こまめに訪問し老人の孤独死対策に力を入れていた。

特に、65 歳以上の独居男性は、部屋にこもる傾向がある為、日中にお茶会を開催したり月に 1 度、「メンズバー」と名付けて夜、飲み会を催す。

仮設住宅で生活出来るのも、あと 1 年を切った中で、被災者 1 人 1 人の自立には、まだ多くの問題がある。

しかし、県・市・町は、この災害をチャンスにかえて街の商業施設や観光施設、道路事情を含めた街のデザインを模索しはじめたようだ。

未来にむかって明るい展望を切り開いて欲しい。

未来にむかって明るい展望を切り開いて欲しい。

（調査：大分県防災活動支援センター 研究員 遠山香里）